

KYOKY 136

特集 特報！京都教育大学シンボルフレーズ決定
「先生になりたいーそれはかなう夢」



京都教育大学

<表紙>

『奄美の森でクモになる』

附属桃山小学校6年 藤網 亮介

奄美の森にいる珍しい生き物に会いに行くために、6年2組のみんなで来た。

すると、何か不思議な光が近づいてきて、それを浴びたぼくらは、いろんな生き物になっちゃった。ぼくは小さな小さなクモに・・・

この作品は、亮介の亮の字をクモのもようにしたことがポイントです。

葉の色をどのような緑色にするか、実際にその色をつくることに苦労しました。

<裏表紙>

『ゆめのでんしゃ』

附属桃山小学校1年 岡田 奏人

ぼくは でん車が 大好きです。

ぼくは、ホームから 海行きのでん車に のって
海に行こうと わくわく ドキドキ しているところです。

フルーツの木は おいしそうに でん車は乗ってみたいな！！
と 思えるように かきました。



UNIVERSITY
ACCREDITED
Mar. 2013

CONTENTS



<表紙> 附属桃山小学校6年 藤網 亮介
<裏表紙> 附属桃山小学校1年 岡田 奏人

特集

2 **特報！**
京都教育大学シンボルフレーズ決定
学長補佐（広報担当）国文学科教授
浜田 麻里

海外見聞録

7 **バイク電飾マンホール**
附属京都小中学校教諭
深蔵 心理

留学生の声

9 **やっぱり、一期一会！**
日本語・日本文化研修生
アユ・スクマ・ウイディディアルディア
（インドネシア出身）

研究余滴

10 **現代の「ものづくり」**
産業技術科学科教授
関根 文太郎

京教今昔物語

12 **京教大で過ごした26年**
家政科教授
中西 洋子

京教学内探訪

14 **キャンパスでのチョウの楽しみ方**
理学科教授
村上 忠幸

附属学校園だより

16 **附属京都小中学校における教育実習**
附属京都小中学校 初等部 副校長
小原 武

附属学校園だより

17 **ポスター発表賞・生徒投票賞 受賞**
～平成27年度SSH生徒研究発表会～
附属高等学校 副校長
市田 克利

18 **沖縄修学旅行と「平和学習」**
～沖縄とかがわり続けて～
附属特別支援学校 副校長
高岸 正司

新任の先生から

19 **法律を身近に**
社会科学科講師
比良 友佳理

学習はいつまでも
大学院連合教職実践研究科准教授
徳永 俊太

20 **「心に届く」指導と対応**
大学院連合教職実践研究科教授
河村 豊和

卒業生の声

21 **生徒第一**
大阪府立牧野高等学校 教諭
和田 美紀子

書道を好きな生徒を育てる
大阪府立芦間高等学校 教諭
藤原 季代

学生広報委員会

22 **知っていますか？**
～野良ネコのエサやり問題～

ようこそ大先輩

24 **追懐「到り得て帰り来れば別事なし」**
京都教育大学名誉教授
脇坂 淳

読者の皆さまへ・編集後記

25 **地域連携・広報委員会委員長**
細川 友秀

特報！ 京都教育大学シンボルフレーズ決定

学長補佐（広報担当）国文学科教授 浜田麻里

このたび国立大学法人京都教育大学ではシンボルフレーズを以下のように決定しました。

「先生になりたい——それはかなう夢」

このシンボルフレーズが策定されるまでの道のりやそこに込められた思いをみなさんにご紹介したいと思います。

1. 京都教育大学ブランド再構築プロジェクト

京都教育大学では平成26年度から大学のブランド再構築に取り組んでいます。

「ブランド」というと高価な洋服や装飾品を思い浮かべる人も多いかと思いますが、これはブランドということばのもつ意味のごく一部分にすぎません。

米国マーケティング協会はブランドを「他とは異なるものとして同定するための名前、ことば、デザイン、シンボル、その他の特徴」と定義しています（AMA Dictionary. <https://www.ama.org/>）。例えば「京都教育大学」と

聞いて、他の大学とちがう何らかのイメージが喚起されたら、それが京都教育大学のブランドです。存在感のあるブランドは頭の中にある「整理箱」のようなものだと言われています（アーカー、D.A.『ブランド優位の戦略—顧客を創造するBIの開発と実践』p.12）。あるブランドについて情報が受け取られると、それは整理箱の引き出しにしまわれ、蓄積されます。引き出しには、プラスイメージの引き出しもあればマイナスイメージの引き出しもあります。しかしそもそも整理箱がなければ、いくら情報を発信しても蓄積されることはありません。

また「ブランド」というのは単なるイメージ戦略であって中身を伴わないものだと思っておられる方もおられるかもしれません。しかし、日本の有数の



企業のブランディングに関わるクリエイティブディレクターのムラカミカイエはインタビューに答えて以下のように述べています。

ブランディングは、単に表層を繕うことではなくて、ある本質を彫刻のように削りだして、ブランドが継続するための原動力や価値を見いだしていくことです。それはいわゆるファッション的なものとは異なり、人類の英知の総体といっているいいものです。

僕にとって、ブランディングは人生に置き換えられるものです。人生もブランディングという仕事も、成功と過ちの繰り返しと、その研鑽から、未来を見出していくということには変わりありません。

（朝日新聞デジタル版2014年9月26日）

つまり、大学のブランドを構築するということは、大学の本質は何かということを見つめることであり、そこから大学の進むべき方向性を見いだしていくことにもつながると考えられます。

2. シンボルフレーズを作ろう！

ブランドを構築したら、それを象徴するようなブランドシンボルを作ることで、効果的に相手にメッセージを伝えることができます。

本学はシンボルマークとしては現行のものがありませんので、当面の目標をシンボルフレーズを作ることに決めました。

当初は「せっかくの機会だからカッコイイフレーズをコピーライターにお願いして作ってもらうのがよいのではないかと考えていましたが、他の組織での取り組みの様子なども学ばなかつたので、それではうまくいかないのではないかといい思いに至りました。

プロにお願いすれば、たしかに手際よくシンボルフレーズをまとめてくださるかもしれませんが、しかし、もしブランディングが「人生」だとするならば、誰かに方向を指し示してもらって満足のものとなるのでしょうか。少しぐらい格好悪くても、「成功と過ちの繰り返しとその研鑽から」しか我々の未来を見だしていくことはできないのではないのでしょうか。

こうして、検討の結果、シンボルフレーズを決めるために全教職員が参加し我々のアイデンティティとは何なのかを徹底的に議論していこうという決意が固まりました。

覚悟を決めはしたものの、それは本学ではいまままで前例のない試みであり、文字通りの暗中模索の長い道のりとなりました。

3. 京都教育大学の強みって？

企業であれば、ブランドを考える際に中心に据えるべきは商品を購入してくれる「顧客」です。大学にとっては、教育・研究・社会貢献というサービスを提供する相手がそれに当たるでしょう。学生、院生、附属学校の児童生徒、卒業生を採用したり、現職教員研修のパートナーである教育委員会、実践研究のお手伝いをする地域の学校や先生方、公開講演会等に参加して下さる地域の方々、さらには文部科学省、ということになるでしょう。ここでは「ステークホルダー」と呼ぶことにします。「ステーク」とは競馬などの賭け金のことで、それを持っている人、つまりは京都教育大学の命運に関わっている人というが大袈裟でしょうか。

全員参加の議論の中でまず教職員のみなさんと考

えたのは「京都教育大学の強みって何？」「その強みを使って、ステークホルダーのために何ができるの？」ということでした。

大学教員は教授会の後、事務系職員は研修の中で、また各附属学校園毎に特別に時間を設定していただき、4~5名のグループに分かれてブレインストーミングを行いました。カラフルな付箋で色分けしながら、全員でアイデアを出しあい、議論を進めていきました。



▶付箋を貼りながら議論を深める

本学は「教員養成大学である」ことは日頃から自明の理のように頭にあるのですが、いざ「では、教員養成大学としての強みは何だろう？」と考えてみると、「自然が豊か」「駅から近い」の次に挙がってくるものは人によってそれぞれです。また、その強みを活かしてどんな教員を養成するのかとなると、なかなかイメージはまとまりません。

大学以外に全ての附属学校園を回るのに時間は掛かりましたが、みなさんの協力を得て、無事全部局でブレインストーミングを行い、みなさんから意見を出していただくことができました。

4. 学生、同窓生、地域の方々にとっての京教ってどんな存在？

また、自分たちが強みだと思っていることは、客観的に見てもそうなのか、教職員以外の人達から京都教育大学はどのように評価されているのかを知ることも大切だと考えました。

そこで、大学のことをよく理解してくださっていると思われる学生、卒業生、大学の近隣にお住まいの地域の方にアンケート調査を行うことにしました。

学生については卒業を間近にした4回生に協力を依頼し、222名の回答を得ることができました。また卒業生については、同窓会の協力の下、同窓会名簿掲載者全員に協力をお願いし、1,318名もの方に回答いただくことができました。驚異的な回収率です。とくに古い卒業生の方が自由記述欄に熱心にご意見をお書きくださったことをありがたく感じました。

近隣の方については、毎年地域で実施されているイベント「深草ふれあいプラザ」に参加させていただき、自治会連合会の会長様に協力をお願いしました。そして自治連合会会長様から各町内会の役員の方々にアンケートの回答をお願いしていただきました。

アンケートから明らかになったことをいくつか紹介します。まず、大学のイメージとしては「誠実である、正直である」「好感が持てる」「信頼できる」がどのグループにも共通していました。まじめに日々取り組んでいることが評価されたのは大変うれしいことです。

興味深かったのは、学生達の自己評価では「コミュニケーション能力が高い」「リーダーシップがある」「問題解決能力がある」等について「とてもそう思う」「そう思う」「ややそう思う」の合計が7割以上であるのに対し、地域の方で同じように思っている方はいずれも半数以下だったことです。学生の自己評価が甘いのかもかもしれませんが、本学卒業生で、とくに学校教員として京教の学生達をよく見ておられる方の評価はそれほど悪くはありませんでした。学生達のよいところが十分に社会にアピールできていない可能性もあるなあと感じました。

5. いよいよシンボルフレーズ！

こうして集まったたくさんのデータを抱えて、広報戦略検討専門委員会のメンバーがシンボルフレーズをまとめるために集まりました。しかしながら、当初の予定の時間では納得できる結論には至らず、再度時間を取ってじっくりと話し合うことが必要でした。年度末の多忙な時期にも関わらず、委員全員が時間をやりくりして集まって話し合いました。

話し合いの結果、まず、京都教育大学がステークホルダーに何が提供できるのかを表す「基本的価値」が以下のようにまとめられました。

京都教育大学は、京都の伝統と豊かな緑という文化的にも自然的にも恵まれた環境の中で、実践力と人間力を兼ね備えた教員を養成します。また、幼稚園から小、中、高校、特別支援学校まで、様々な学校の教員に対し、日々の実践を向上させ未来の教育を切り拓いていくことができるよう支援します。

次にこの価値を象徴するようなフレーズをメンバーで考えました。全部で5つの候補が選ばれました。



▶学生も投票。「うーん、どれがいいかなあ…」

5つの候補の中でどれがシンボルフレーズとしてもっとも相応しいか、全学の教職員による投票が行われました。教職員だけでなく学生の意見も聞くべきだという提案があり、学生にも投票してもらいました。昼休みに大学会館前にボードを掲示して、5日間投票を呼びかけました。

投票の結果を参考に最終的には企画調整室、役員会で議論が行われ、もっとも多くの得票を獲得した「先生になりたい——それはかなう夢」がシンボルフレーズに選定されました。

6. シンボルフレーズに託された思い

全教職員のブレインストーミングの結果、優れた教員を学校現場に送り出すことが京都教育大学の目指すべき価値であることには全く異論はありませんでした。しかし、どうすれば我々のその思いを社会に発信していくことができるだろうか…それを考えていたとき、「京都教育大学の卒業生でよかったことは？」という質問に対する卒業生の答えが目にとまりました。

「教職に就くことができたこと」「現場で楽しい思い出をつくることができたこと」…京都教育大学で学んだことで「教員」というすばらしい職業に就くことができ、現場での子どもたちとの関わりの中でたくさんのやりがいを感じる事ができたことこそが京教の魅力。多くの卒業生がそのように綴っておられました。

また、学部4回生も同じように、京都教育大学に入ってよかったこととして、「免許が取れた」「教員になれた」と多くの人が答えていました。卒業生と同じように、京都教育大学で学んだことで教師になりたいという夢をかなえることができたということが、彼ららしいちょっとシニカルな調子も含めて表されています。もちろん、「教職という同じ目標に向かって頑張

る仲間と出会えたこと」と書いてくれた人達もたくさんいました。

教員養成大学である本学は、まずは教員という仕事のすばらしさを若者達や社会全体に伝えることが必要でしょう。教師になりたいという高校生の夢に、そして、教員採用を目指す学生達のがんばりや、励まし合いに、心からのエールを送りたい、そのような気持ちをストレートに表現したのがこのシンボルフレーズです。

これからシンボルフレーズが多くの人達に愛され、みんなに夢を与え、また教職員も学生も互いに叱咤激励し合うための合い言葉として使われるようになることを心から祈念してやみません。

地域の方に京都教育大学はどのように評価されているのか？

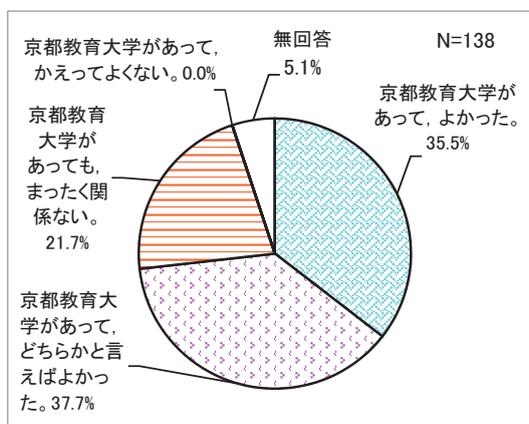
今回のアンケート結果から、京都教育大学は地域の方にどのように評価されているのかを探ってみましょう。

「お住まいの地域に京都教育大学があることについてどのようにお考えでしょうか」という問いに対しては「よかった」「どちらかと言えばよかった」が合わせて7割を超えました。また、「地域社会・文化に貢献している」かどうかについては「とてもそう思う」「そう思う」「ややそう思う」が半数を超え、京都教育大学の存在は一定、地域の

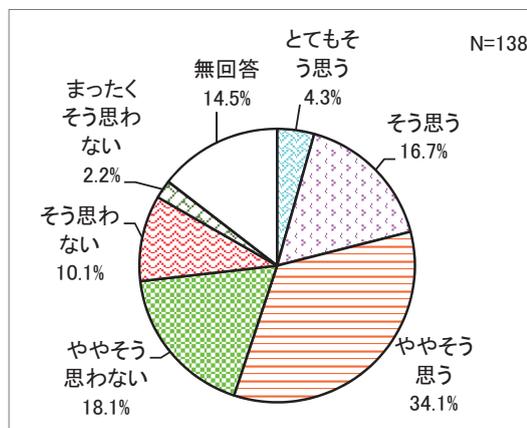
方から支持されていることがわかりました。日頃から「うたとお話の会」、地域の保育園や幼稚園への出前公演等のイベントを熱心に継続してこられた幼児教育専攻の教員や学生の取り組みが高く評価されていました。

アンケートでは「もっと積極的に地域に関わってほしい」という意見が多く寄せられました。京都教育大学があって「とてもよかった」と答えてくださる方をもっと増やしていくことが今後の課題です。

▶「お住まいの地域に京都教育大学があることについてどのようにお考えでしょうか」



▶京都教育大学は「地域社会・文化に貢献している」



お待たせしました！そったクッキーの予約販売、正式スタート！

これまで臨時販売でご好評をいただきながら、「生協に行っても売ってない」「いつ行ったら手に入るの?」と、まぼろしの存在になりかけていた大学オリジナル「そったクッキー」がついに生協店頭で予約いただけるようになりました。

来客や講演会講師への茶菓として、帰省や出張の際の手土産として、イベントの記念品として、…京都教育大学の魅力を多くの方に知っていただくため、さまざまな用途でご活用いただけましたら幸いです。



●「そったクッキー」とは？

京都教育大学のマスコットキャラクター「そったくん」をイメージした大学公式グッズのクッキーです。2013年夏から約1年半の歳月をかけ、京都教育大学の学生計11名と教員の有志によるプロジェクトで開発されました。伏見区内にある障がい者の就労移行支援施設「京都いたはし学園」が製造、大学生協で販売しています。

京都教育大のシンボルマークの藤色・若草色・白色に因んで紫芋・抹茶・プレーンの3つの味があります。抹茶・プレーンは伏見の酒蔵の酒粕入り。紫芋はしっとりした食感が特徴です。丸い形はそったくんの卵をかたどっており、KYOKYOの文字が刻印されています。

「そったくん」のイラスト入りの包装も学生がデザインしました。

なお、このプロジェクトについては、京都新聞、旺文社『蛭雪時代』および大学受験パスナビサイトでも取り上げられました。



▶シンボルマークの3色にちなんだ味が各2袋、計6袋入。



●お申込方法

生協店頭、メール、お電話にて

- ①お名前②ご連絡先③ご注文商品名④必要数
- ⑤お受取日

を明記の上、お申し込みください。

メール：coop@kyokyo-u.ac.jp

TEL:075-644-8358（内線8358）

お申込、お受取は学生会館2F購買部までお願い致します。（学外の方への発送は承っておりません）

●予約締切

お渡しの2週間前までをお願い致します。

（平日のみ受付：2F購買部営業時間外の場合、翌営業日の対応となります）

●予約価格

上記2週間前までのご注文分については、

1箱980円（税込）（通常価格1,000円（税込）にて承ります。

※バラ売り1袋は予約時も通常価格140円（税込）

●予約単位

3箱～（バラ売りの場合18個～）

製造ロットの関係でなるべく、バラ売り30個以上、もしくは5箱～でお願いできれば幸いです。ぜひお誘いあわせの上ご利用ください。

問い合わせ

メール：coop@kyokyo-u.ac.jp

TEL：075-644-8358（内線8358）

バイク電飾マンホール

附属京都小中学校教諭 深 蔵 心 理

1. 釈然

2、3階建ての鉄筋がむき出しになった建物には、それがルールかのように煤がかった様々な色のネオン・看板がぶら下がっている。5、6階建てのアパートには、バルコニーという概念はなく、壁に直に窓。それらに対抗するかのように鮮麗されたスターバックスが並ぶ。新と旧がしのぎを削るかのように、街が形造られているようだ。



大学のグローバル人材育成の研究の一環として、海外視察の為に台湾へやってきた。台北国際空港からバスに少し揺られて、桃園から台湾高速鉄道に乗る。日本の新幹線技術が導入されているということで少し胸が高鳴る。平日の昼頃、人影はほとんどない。次の電車まで暫く時間があつたので、何気なくホームから線路をのぞき込んだ。その瞬間「ピー」というホイッスルの音。若い女性の駅員さんが、眉間に皺をよせ私の方を睨んでいる。すぐに「すみません」と言い、軽く会釈し愛想笑いを浮かべる私。



その日の夜。台中の夜市を散策していると、結構なスピードでバイクが突っ込んでくる。ましてや、左折の歩行者優先など存在しない。京都で言えば、新京極通りをバイクが颯爽と走っていく感じだろうか。昼間のホームでの出来事から比べると信じられない。なんだか釈然とせず矛盾を感じる。

とにかく街にはバイク（原付）が溢れている。テレビで見たことがある。道路を走る大量のバイク。本当に多い。しかも、日本人の感覚から考えると、もう、道路交通法違反と思われる運転。しかし、そのバイクが、バイク置き場には整然と並べられている。数十台、数百台、整然と並んでいる。日本では見られない光景。なんだか釈然とせず矛盾を感じる。



2. 競争

競争原理を学校現場に持ち込む。この言葉だけを聞くと、教育関係者はちょっと一歩迷う気がする。全国学力調査の結果を公表して、云々かんぬん。

これは、日本だけの特徴なのだろうか。視察でお邪魔した、嘉義市文雅国民小学校。道路からよく見えるところに、『金賞』『銀賞』の垂れ幕がかかっている。これは、嘉義市の教育賞金賞受賞と



全国レベルの教育省銀賞受賞の垂れ幕とのこと。

小学校の教室を見て回ると、『早鳥獎』・『生活優勝競賽』のプレートがかかっている教室がある。これは何だろうと思い尋ねると、『早鳥獎』は一週間遅刻がなかったクラスの表彰。『生活優勝競賽』は学年で競う生活賞。これらを日本に置き換えて考えてみよう。



京都市や国が学校を表彰するというのは、あまり馴染みがない。学校に垂れ幕としてかかっているのは、学校のスローガンや『全国大会出場おめでとう』などのスポーツやコンクールの表彰が多いだろう。

次に、『早鳥獎』を考えてみる。一週間遅刻がなかったクラス？と考えるとほとんどのクラスが表彰されるような気がするが、これを日本でやってみると…こんな心配がある。朝登校しづらい子がいる学級はどうなるのだろう。家庭の事情で遅刻しがちな子がいるクラスはどうなるのだろう。そのクラスはいつも表彰されない。とそんなことを考えると…今の日本では考えにくい。

がんばったから認められるのは当然という考え方。日本では、どちらかという自慢することではなく、誇りとしめようといった感じか。自分からはあまり、進んで自分の表彰を紹介しない。

3. 電飾

街の至る所に電飾。看板の電飾。夜市の電飾。お祭りの電飾。ちょっと日本人の感覚なら『けばけばし



い』といった感じだろうか。ただ、台湾で数日過ごしているとこの電飾が懐かしく感じられてくるから不思議だ。



4. 終わりに

そこら中に日本の文字や文化が溢れている台湾。郷にいれば郷に従えの精神がいいのかもしれないが、ずっと比べていた。

日本にもよくある地元固有のマンホール。



やっぱり、一期一会！

日本語・日本文化研修生 アユ・スクマ・ウイディディアルディア
(インドネシア出身)

2014年9月、1年間の留学決定。留学先は高校3年生からずっと憧れている国である日本。日本での留学という夢が達成できるのはとても幸せだったが、初めて1年間という長期間外国で生活することにも心配を抱えた。「日本語が上手に話せないので言葉が通じるのかな。友達ができなかつたらどうすればいいのかな。この1年間うまくやれるのかな。」と、不安な気持ちが消えなかった。

他の国から来た留学生との初会は向島学生センターというところだった。ベトナム人、インド人、中国人とタイ人、また3人のポーランド人、意外とすぐに仲良くなり、あれから一緒に授業を受けたり、食事をしたり、遊んだりすることが沢山あった。時間がたつにつれ、今はまるで自分の家族のようだと感じて、この国際家族と離れたくないという気持ちをもっている。

京都教育大学では、留学生向けの授業は日本語の授業以外に特にないので、日本人の学生と一緒に授業を受けることが多く、この1年間全て日本語で行われる授業を受けた。やはり日本語がまだまだ私にとっては難しくて分かりにくくて、レポートや他の課題を作成するためにはすごく時間がかかった。しかし、諦めようとは思っていない。逆にこのような環境は日本語の能力を高める機会になり、日本人の学生と出会ったり、授業でディスカッションしたり、授業に対する日本人の考え方や意見を聞いたりすることができる。

この留学期間に体育学科に所属し、スポーツ・マネジメントのゼミに出た。元々体育についてはよく分からないが、ゼミを受けてどんどん興味が増し、先生の下で体育授業に関する研究をすることにした。同じゼミを受けている日本人の学生とも仲良くなり、様々な日本のことを教えてもらった。日本での生活に順応できるのは、彼らのおかげだ。

授業だけではなく、日本語・日本文化の知識をより深めるために、2014年10月から京都教育大学の茶道部に入部した。先生方や部員はみんなすごく温かく歓迎してくれて、毎回分かりやすく、一歩ずつ稽古を指導してくれたおかげで、今は複雑なお茶の点前ができるようになった。2015年の夏のお茶会でようやくお客さんに自分で点前をすることができて非常に嬉しかった。さらにお茶に関わる活動として茶碗作りと浴衣を着る練習があり、今は自分で浴衣を着られるようになった。茶道部で習った様々なこと中、一番印象

に残っているのは「一期一会」という日本の諺。この機会は二度と繰り返されることのない、一生に一度の出会い。そのため、大切にしなければならない。私もそう思っている。折角の留学なので、精一杯楽しんで、もっと日本のことを沢山学びたい。

そういう気持ちでまた京都で、日本で色々な活動に挑戦してみた。例えば、「フィラ」という京都教育大学の国際交流サークルの楽しいイベントに参加することによって、日本の、特に京都の話や遊びなどを体験することができた。大学のクラブ活動以外にもボランティア活動や、スピーチコンテストなど京都の色々なイベントに参加し、ものすごく大切な体験になった。



京都女子留学生弁論大会での様子

私は、宗教的の理由で頭にスカーフを巻いている。これはやはり日本人にとって不思議なものだが、周りにいる日本人の友達やボランティアなどで会った日本人は違和感なく私に話しをかけてくれて、逆に私のこと、インドネシアについてもっと知りたい人と沢山出会った。そのため、日本でのインドネシアの文化を紹介するイベントに参加した。インドネシアのことを、もっと日本人に知って欲しい。

あと1ヶ月後留学期間が終わってしまふ。この1年間は数え切れない良い思い出ができた。日本語、日本のおかげで新家族ができ、色々なことも体験でき、素晴



らしい一年間との一期一会！でもこれは始めの一步だ！まだ沢山の夢を達成したい。絶対日本に戻りたい。私の夢は、日本から始まった。お世話になりました！

現代の「ものづくり」

産業技術科学科教授 関根 文太郎

私の専門は精密加工、平たく言えば、「ものづくり」である。これは、主に工作機械による精密電子部品の製品精度の向上をテーマとする。近年、工業の発展はめざましく、中でもマイクロコンピュータ・携帯電話など、電子機器の果たした役割は大きく、これらの電子産業は、電子部品を基盤として、ノートブック型コンピュータ、超小型携帯電話、デジタルビデオカメラ、大容量メモリー、CAD/CAM端末やHDTV（高精細テレビ）など様々な電子機器を構成している。

私たちの身の回りの製品には、それぞれ目的に応じて必要な精度がある。例えば、電気機器や輸送機械の精度は1/10mm程度である。一方、電子機器（コンピュータや携帯電話）の部品精度は、数 μm （1/1000mm）オーダーが必要であるのに対し、製品の小型化や高機能化によって、高精度化が求められ、今やnm（1/1000 μm ）オーダーの加工精度を達成している。この長さを微生物などに例えると図1のようになる。また、髪の毛は、60～80 μm であり、この加工精度は、原子の単位（ $\text{pm}=1/1000 \text{ nm}$ ）で測る。

これらの製品や部品の大部分には、プレス機械に取り付けた、金型を工具とするプレス加工法が、圧倒的に有利な方法として採用されている。以下、プレス機械を図2に、金型を図3に示す。

プレス機械がなかった時代には、鍛冶職人と呼ばれる人たちが、金槌と炉で自由な形状に製品を作っていたが、機械によって様々な加工が可能になり、同一精度の製品が出来るようになると、前述したような高精度化が一つの目標となった。

そこで、私は、プレス加工製品（ICリードフレーム：電子機器の部品となる電子デバイスの骨組）の精度の決定要因を分析し、大きく①機械・②工具・③運転条件に分け、それをさらに細かく分類し表1のよう

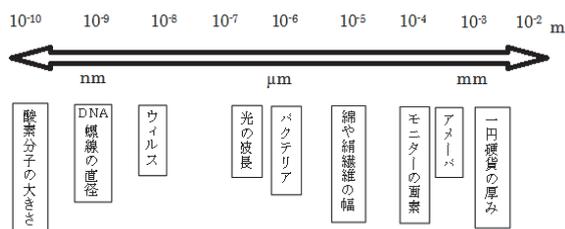


図1 大きさの比較

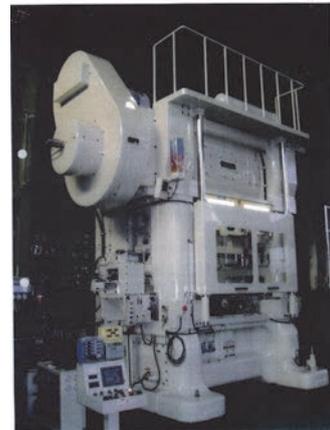


図2 金型を取り付けたプレス



図3 金型

にまとめた。これは、他の加工法についても同様の分析方法が適用される。これらの、要因について影響の大きいものから、対策を立て、実践（実験）し、その効果を検証する。そして、そこから得られる原因と結果を結びつけ、一般化して説明するためのモデルを構築しこの結果を、実際の工作機械で実証する。

表1 リード精度の影響因子

- 1) プレスの動的精度
- 2) 金型の動的精度
- 3) 打抜き速度
- 4) 板押さえ力
- 5) 潤滑
- 6) ポンチ横長比
- 7) 工具クリアランス
- 8) 工具摩耗
- 9) リード細長比
- 10) リード形状
- 11) 打抜き順序
- 12) リード材料
- 13) スリットによる残留応力

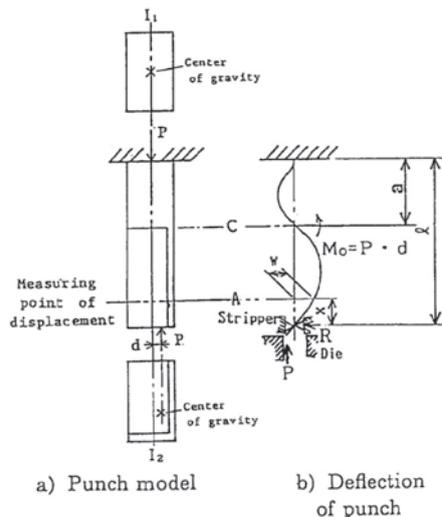


図4 工具の変形モデル

次に研究手法として、2つの例を示す。一つは工具形状から生じる変形問題、今ひとつは金型構造から生じる振動問題である。その中で、図4に示すのは、変形モデルである。ここでは、工具の断面が非対称なため、加工時に工具の根元部分に偏心荷重がかかり、モーメント変形が生じ、製品に不具合が発生する。このため、先端と根元部分の断面の図心がずれない工具形状にして、モーメント変形を押さえている。続いて、図5に示すのは振動モデルである。素材をプレス加工するとき、製品の幅が小さくなるため、材料を大

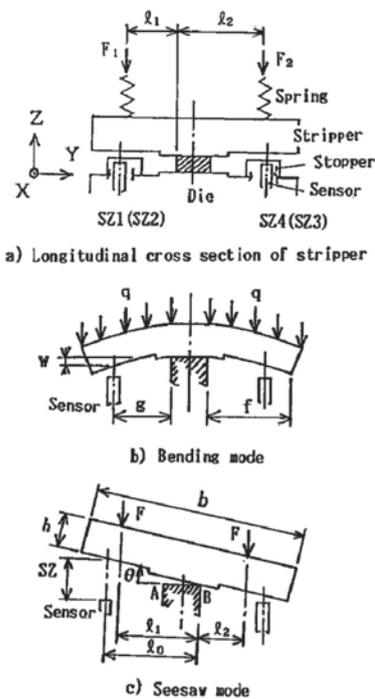


図5 金型の振動モデル

きい力で押さえる必要がある。そのため、加工時に押さえる力が不均等になり、振動が生じる。この場合も振動の様子を測定し、振動のモードを分析した結果2つのモードが発生していること、そしてその発生原因が、解析の結果金型全体の形状と押さえる力の位置により影響を受けることが明らかになった。そのため、形状と力のポイントを修正して振動を小さく抑えることができる。

このように、現象を分析し、原因と結果の因果関係を明確にして行くことが、工学の基本的な考え方である。

実は、原因と結果は一つの相関ではなく、複雑にからんでおり、それを明らかにすることも解析力の一つで、経験や勘も必要になる。例えば、プレス職人、金型職人と呼ばれる人がいる。彼らは今も、昔も、長年蓄積された経験と勘を駆使して、機械の加工精度以上の精度で「もの」を作り上げる。

本学科で行っている機械の実習授業では、一つの製品を作るため複数の部品を、工作機械を用いて、図面に従って、幾種類かの材料を加工している。ところが、一個の製品や部品を作る過程は一つではなく複数あり、どれを選ぶかは、人それぞれ何（時間、材料、組立の手間、外観など）を重要視するかで変わって来るものである。昔の職人の段取り八分という言葉通り、工程の全体を見通すことや、作業の手順を考えるプロセスこそが、「ものづくり」で最も重要な「創造性」を養うことができる。これは学生にとっては、彼ら自身の「学習意欲」・「興味」・「関心」の持続に直接結びつく体験をすることにより、教師としての資質を磨いていくことにつながるのである。

本学の学生が教員になった時、将来、様々な問題に出会うだろう。その課題を解決するには、「自分がこれまで学習した考え方や分析法を用いて、解決に当たる事が出来る」という心構えを持つ。これは、技術科に限らず、他学科の学生にも言えることである。

これまでの研究と経験を基に、本学の中学校技術科教員養成の学生に、「ものづくり」のプロセス、さらに工作機械の取扱い方と安全意識をいかに指導し教育するか、これは私の本学での、一つの課題である。

現在では、アイデアを簡単に形に出来る**3Dプリンタ**が注目を集めている。**3Dプリンタ**は「夢の工作機械」とさえ言われている。この**3Dプリンタ**の長所を教育に活用できるよう、私たちも研究を行っている。「ものづくり」の楽しさを、子供から大人まで、幅広く伝えられる様、祈念しつつ。

京教大で過ごした26年

家政科教授 中西 洋子

1. はじめに

私が京都教育大学に赴任したのは平成2年(1990年)4月1日でした。家政科食物(食品・調理)担当助教授として採用いただきました。それから早や26年、定年退職まであと7か月余りとなりました。今回思いがけず、本学広報の「京教今昔物語」の執筆依頼を受けました。京教大で過ごしました26年を振り返るいい機会を与えていただいたと感謝し、お引き受けいたしました。

2. 大学組織の変化と家政科

私が赴任しました平成2年(1990年)は本学では大学院研究科が設置された年にあたります。その2年前の昭和63年(1988年)には総合科学課程が設置されています。大学の組織が大きく変革した時期だったようです。この当時、学部「教育課程」は8課程38専攻に分かれており、私の所属する家政科が直接担当するのは、小学校教員養成課程家政専攻(家政専攻一類)、中学校教員養成課程家政専攻(家政専攻二類)および総合科学課程情報教育コース情報生活専攻でした。平成2年(1990年)4月に私と一緒に入学した学生さんは家政専攻一類15人、家政専攻二類5人、情報生活専攻5人でした。

その後、平成9年度(1997年)改組で4課程33専攻となり家政科は、初等教員養成課程理系教育専攻(家政)、中学校教員養成課程家政専攻および総合科学課程環境学コース生活環境学専攻を担当することになりました。大きな変化は初等教員養成課程が系で括られたこと、および総合科学課程でも再編が行われ、家政科の関係するところでは、情報生活専攻が廃止され、生活環境学専攻が新設されたことです。

平成12年度(2000年)改組では、学校教育教員養成課程(5つの系)と総合科学課程(5コース)の2課程となり、家政科は学校教育教員養成課程生活・技術教育系家庭科教育専攻と総合科学課程環境学コース生活環境学専攻を担当することになりました。本改組には入学定員の削減が伴い、本学全体で120人減となりました。

平成18年度(2006年)改組では、総合科学課程が廃止され、学校教育教員養成課程一本となりました。家政科は学校教育教員養成課程家庭領域専攻を担当することになりました。入学定員16名で現在に至っています。

3. 家政科教員の変遷

赴任当初、家政科教員は、家庭科教育2名、被服2名、食物2名、住居・家庭経営1名、教務職員1名の計8名でした。その後現在まで定年退職、転出等による入れ替わりが数多くあり、構成員数が6名となった時期もありましたが、平成19年度(2007年)以降7名となり現在に至っています。現在の構成は、家庭科教育2名、被服1名、食物2名、住居1名、家庭経営1名の計7名です。家政科教員の変遷の詳細については、「家政科同窓会(KYOKYO HIL'S)50周年記念誌」に詳細に記されています。

4. 担当授業について

赴任当時、授業は1回生対象に「食品学概論」「基礎実験」、2・3回生対象に「食品化学」「食品材料学」「食品学実験」「調理実習II」など食品・調理分野を中心に担当いたしました。

平成9年度(1997年)改組で専攻専門科目の名称を一部変更しましたが科目数、単位数等は同じです。1回生対象に基礎セミナーが加わりました。家政科ではクラス担任が担当します。私はこの26年間で環境学コース基礎セミナーを含めて計4回担当いたしました。

平成12年度(2000年)改組では、専攻専門科目の見直し、半減が行われました。免許法の改正に伴うものです。精選・統合により、食物分野の科目は「食物科学」「食生活実習」「食生活論」「食品材料学」「調理科学実験実習」「食品化学」「調理科学」「食品・栄養学実験」「食料経済・食料政策論」としました。調理実習関連科目は今回の変更で通年2科目(6単位)から半期2科目(3単位)に半減いたしました(調理科学実験実習と食生活実習)。また、「食品学実験」と「栄養学実験」を統合して「食品・栄養学実験」としました。家庭科など実験実習が重視される分野でのこの削減は、厳しいものとなっています。現在もこの状況は変わりません。

平成18年度(2006年)改組では教育課題対応科目として「公立学校等訪問研究」が新設され、教科専門担当教員5名で担当することになりました。平成26年度までの9年間で、私は宇治市立宇治小学校7回、京田辺市立培良中学校1回、京都府立桃山養護学校2回、京都市総合教育センター1回の訪問で、学生ともども貴重な体験をさせていただきました。

5. 新入生合宿研修（水泳訓練も含めて）

今では新入生合宿研修は1回生前期の恒例行事となっていますが、赴任当時はありませんでした。その代り「水泳訓練」というのが1回生の夏休みの最初に天橋立でありました。私は赴任1年後の平成3年（1991年）にはじめて1回生担任となり、水泳訓練に同行しました。7月16日～21日、5泊6日の合宿でした。「京都教育大学百二十年史」によりますと、①全学生の皆泳、②教師の資質としてのプールや野外での水泳指導、管理能力の育成、③1回生の集団生活の体験と指導、の3点を目標に1956年～1991年の間毎年実施されていたようです。私はこの最後の年（1991年）に参加したことになります。本稿を書くに当たり昔の資料をさがしていますと「平成3年度新入生合宿研修（臨海水泳訓練）実施要項」というしおり（写真1参照）が見つかりました。日程、運営組織、参加者名簿、部屋割り、水泳実習計画などが記されています。家政科学生は15名が参加したようです。多くの学生が最終的には遠泳に参加していました。泳げない私にとっては驚異的なことでした。わたしの担当は、救護係、遠泳を見守りながら、海岸線に沿って器材を積んだりヤカーとともに歩くことでした。しおりのタイトルを見ますと、新入生合宿研修（臨海水泳訓練）となっています。水泳訓練が新入生合宿研修を兼ねていたようです。



写真1. 平成3年度水泳訓練しおり

その後、1回生全体を2グループに分けた大規模研修が行われていた時期もありましたが、平成12年度（2000年）以降、専攻単位など小規模で行くようになりました。私が1回生担任として同行したのは、平成14年度（2002年）環境学コース「琵琶湖一周」、平成16年度（2004年）生活・技術教育系「かみなか農楽舎：農業体験」（写真2参照）、平成22年度（2010年）家庭領域専攻「伊賀の里モクモク手作りファーム」でした。



写真2. 平成16年度：かみなか農楽舎にて

6. 卒論ゼミおよび卒論発表会

赴任当初、卒論生5名が私のゼミを選んでくれました。私自身その当時、食品に含まれる酵素が食品の貯蔵や調理過程でどのように作用するかというようなことに興味を持ち、研究を進めようとしていました。そこで京教大での私の1期生の卒論テーマも同様の方向で設定しました。対象とした食品はタンパク質分解酵素を含むキウイフルーツです。2名および3名の共同研究としました。

当時パソコンが普及しはじめたところで、論文作成にあたり、まずワープロ練習を指導したのを思い出します。グラフ作成は、ロットリングを使って手書きで作成していました。ほんの数年後、すべてパソコン作成となりました。

卒論発表会は大学の重要行事であり、通常、その準備や司会進行は教員がするものと思っていましたが（前任校がそうでした）、家政科ではその運営がすべて当事者である4回生によって進められました。また卒論の抄録冊子は3回生によって作成されました。これらは大きな驚きでした。この方式は現在に繋がっています。これには担任の関わりはありますが、運営方法を細かく記した「4回生ノート」「3回生ノート」の存在が大きいと思います。現在も上回生から下回生へと受け継がれています。

7. おわりに

先日、坂東忠司先生と岩村伸一先生による公開講演会（テーマ：森をつくる－学びの空間としての京都教育大学の自然と庭）に参加させていただき、学内を散策する機会を得ました。多くの樹木、草花、きのこ等の興味深い解説をいただき、改めて26年間を過ごして参りました京教大キャンパスのすばらしさを実感することができました。ありがとうございました。

（参考資料）

- ・「京都教育大学百二十年史」
- ・「家政科同窓会（KYOKYO HIL' S）50周年記念誌」
- ・学生便覧（履修案内）

キャンパスでのチョウの楽しみ方

理学科教授 村上 忠 幸

1. チョウはいつ飛ぶ？

京都教育大のキャンパスは緑豊かであることは本学のセールスポイントの一つになっています。植物が多いということは、同時に昆虫も多く見られるということになります。今回の学内探訪は、チョウにスポットを当ててみましょう。

四季折々、学内を飛翔するチョウの種類や個体数は様々に変化してゆきます。日ごろ学内を歩いていると必ずといっていいほどチョウに出会うことができます。ただ、少し意識して歩かないと、チョウが飛んでいてもチョウを見ることができません。一般的によく知られているモンシロチョウ、毎年何月ごろから何月ごろまで見ることができるでしょうか。授業などで聞いてみる場合があります。4月頃から6月頃に見られるという意見が大半です。本学では、10月、11月頃まで見ることができます。この話をすると、けっこう驚かれますが、目の前をチョウが飛んでいても気づいていないようです。たぶんイメージで「モンシロチョウは春に飛ぶ」と思っているようです。

学内で見られるチョウの種類は20種程度ですが、それぞれ見られる時期は様々です。

2. チョウと植物の関係は？

チョウなどの昆虫に興味を持つということは、植物へと興味が広がることになります。昆虫の多くは植物を餌としています。これを「植食性」といいます。またその中でもチョウは、限られた植物を餌にしていることから「狭食性」といわれます。チョウと植物の関係といえば花に飛来し、蜜を吸う行動をイメージしますが、それがチョウの「狭食性」の意味するところなのでしょうか。チョウの成虫は、蜜の多い植物ならけっこう広い範囲の植物を訪れますから、吸蜜行動が「狭食性」の正体とはいえないわけです。小学校3年生の理科でもこのような学習をしますが、チョウには卵、幼虫、蛹もいることを学び、そこで「狭食性」（このことばは使いませんが）の主役は幼虫ということを知ります。じつはチョウの幼虫は限られた植物しか食べることができないのです。このような特徴によってチョウが依存している植物が決まっているのです。これを「寄主特異性」といい、チョウと植物の間での進化（「共進化」という）でたどりついた適応の形となります。要するにチョウを見たら「幼虫が食べ

る植物は何？」という認識を持てば、チョウから植物への興味も広がるわけです。

3. 産卵行動の不思議

チョウの幼虫は植物の好き嫌いが激しく、寄主植物以外を与えても頑として受け付けず、餓死してしまいます。となれば、卵を産むお母さんである雌成虫の見極めが、チョウの存亡のカギを握っていることとなります。チョウの産卵行動を野外で見ることは稀ですが、チョウの寄主植物（食草ともいう）を知っていれば、葉の上に卵を見つけたり、幼虫を見つけることができます。さて、雌成虫は何を頼りに寄主植物を選んでいるのでしょうか。これは間違いが許されない行動だけに、雌成虫もかなり慎重に選んでいます。アゲハチョウ類では、上空から植物の色や形、においを頼りに寄ってきて、とどめは葉の味（化学物質）を見るのです。前足を葉にたたきつけ（ドラミング行動）、前足の先にある味覚器官で味を確かめ、大丈夫となると腹を曲げて葉に卵を産み付けます。この瞬間は生命の神秘を感じる感動的なものです。

4. キャンパスで見られるチョウ

以下に本学のキャンパスで見られるチョウをあげておきます。

○アゲハチョウ類…中型のチョウで、後翅に尾状突起があり、春から秋に見られます。

・ナミアゲハ：ミカン科のアマナツ、レモン、サンショウ、カラタチなどが食草。黄色に黒い模様。最も多い（写真1）。



写真1 ナミアゲハ

- ・クロアゲハ：ミカン科を食草。やや大型で、後翅に赤い斑紋。少ない。
- ・モンキアゲハ：ミカン科を食草。黒地に黄色い斑紋。希少。
- ・ナガサキアゲハ：ミカン科を食草。尾状突起なし。少ない。
- ・キアゲハ：パセリ、ニンジンなどセリ科を食草。少ない。
- ・アオスジアゲハ（写真2）：クスノキ（写真3）を食草。翅に青いライン。飛ぶのが速い。多い。



写真2 アオスジアゲハ（飼育ケースの中）



写真3 クスノキ

○シジミチョウ類…一円玉ほどの小型のチョウで春から秋に見られます。

- ・ヤマトシジミ：カタバミが食草。黒っぽい翅色。割りと多い。
- ・ベニシジミ：タデ科のギシギシ、スイバなどが食草。少ない。
- ・ウラナミシジミ：マメ科のエンドウ、クズなどが食草。少ない。
- ・ツバメシジミ：マメ科のシロツメクサ、カラスノエンドウなどが食草。少ない。

○シロチョウ類…小型でよく知られたチョウで、多数みられます。

- ・モンシロチョウ：ナノハナ、キャベツ、ダイコンなどアブラナ科が食草。
- ・スジグロシロチョウ：モンシロチョウに似ていて、やや大型。アブラナ科が食草。

○その他のチョウ

ルリタテハ、コムスジ、キチョウ、モンキチョウ、ツマグロヒョウモン、テングチョウ、ゴマダラチョウ、ツマキチョウ、ヒメウラナミジャノメ、コムラサキ

5. まずは探してみよう

キャンパスを歩いてみると、春から秋にかけて見られることが多いのは、ナミアゲハ、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、シジミチョウ類となります。ナミアゲハはキャンパス以外でもよく見られ、ミカン科を食草としますが、キャンパスにはミカン科植物はそう多くはありません。どうやらキャンパス周辺のミカン科植物を利用しているようです。例えば、正門前のパン屋さんには葉量の多い木（写真4）があります。また、キャンパスで特に注目なのは、アオスジアゲハです。本学にはクスノキ（写真3）が多く、時々卵や蛹を発見でき、運がよいと、上空で雄が雌を追いかける配偶行動を見ることができます。



写真4 正門前のパン屋さんのミカン

キャンパスには本年6月温室（今井健介先生の管理、写真5）が完成しました。A棟南側にあり、すでにアゲハチョウの飼育も始まっています。今年度は試験的にナミアゲハの幼虫、成虫を飼育していますが、来年度からはバタフライガーデンとして実験や観察への期待ができます。



写真5 6月に完成した温室

附属京都小中学校における教育実習

附属京都小中学校 初等部 副校長 小原 武

附属学校としての大きな使命のひとつに「教育実習」があります。毎年、5・6月と9月に4回生の副
免実習、および3回生の主免実習を行っています。

本校は、1年生から9年生までの小中一貫学校です
ので、教育実習期間中は、小学校免許を目指す学生と
中学校免許を目指す学生たちが、初等部、中高等部の
校舎で、生徒たちとともに活気にあふれる充実した毎
日を過ごします。

初等部（1～4年）の生徒たちは、教育実習を毎年
心待ちにしています。実習生の工夫を凝らした授業だ
けでなく、一緒に遊んだり、みんなで給食を食べたり
するのがとても楽しく、思い出に残るようです。最終
日にはお手紙やメッセージカードを手渡し、別れを惜
しむ姿がどの教室でも見られます。



中高等部（5～9年）になると、授業だけでなく、
行事やクラブ活動などにも取り組み、色々な話を
する中で、信頼関係のようなものを感じたり、多少授
業がうまくいかなくても「先生になりたい」という夢
に向かって真摯に努力する姿に共感を覚えたり、小さ
かった頃とはまた違った意識で教育実習生との日々を
過ごしているようです。



中高等部（5～9年）合唱コンクールのあと、教育
実習生が実習記録に次のような文章を書いていた。

…私たち主免実
習生が来る前から
ずっとずっと一生
懸命練習してきた
気持ちを考えると
すごく感動して、子
どもたちが一生懸命何かに取り組んでいる姿にはこん
なにも力があるのだなと思った。とても素晴らしい合
唱だった。（中略）7・8・9年生の合唱は深みや厚さ広
がりなど、さすが上級生というものばかりだった。小
学生がこのような上級生の姿を見る機会は小中一貫校
でなければ見られない。このようなタテのつながりを
たくさん見ることができ、下級生は上級生をお手本と
し、また上級生は下級生のお手本となるよう意識した
行動ができる環境なのだろう。この合唱コンクールを
見させていただく機会を通して、何か一つのことには皆
で取り組むことのやりがいを味わうことのできる「教
師」という仕事に改めて魅力を感じることができた。



合唱コンクールの取組を通して、クラスの子もた
ちだけでなく、7・8・9年生の姿からも、まさに、
教育実習でしか学ぶことのできないものを得て、先生
になりたいという気持ちを強くしている実習生の姿が
浮かびます。

教育実習期間中は、どうしても指導案の作成や授業
の準備に追われますし、ようやく指導案が完成して
も、実際に授業をしてみると、思った通りに行かない
ことも多々あります。また、時には生徒たちとのコ
ミュニケーションに悩むこともあるかもしれません。

しかし、実際に教育の現場に入り、先生方の素晴ら
しい授業に接したり、生徒たちとの関わりの中で彼ら
の成長を実感したりすることで、これまでの「先生に
なりたい」という憧れが、「絶対、先生になる」とい
う真剣な目標に変わり、一人でも多くの
実習生が本物の先生
として成長していっ
てくれることを願っ
ています。



教育実習最後の日

ポスター発表賞・生徒投票賞 受賞

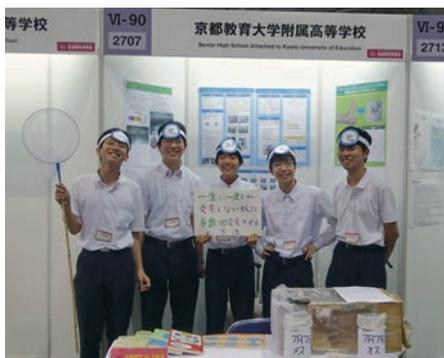
～平成27年度 SSH 生徒研究発表会～

附属高等学校 副校長 市田 克利

平成27年度SSH（スーパーサイエンスハイスクール）生徒研究発表会が、文部科学省・科学技術振興機構の主催により、8月5、6日インテックス大阪で開催されました。全国でSSH研究指定を受けているすべての高校約200校が、ポスター発表形式で参加をしました。各校が日頃行っているサイエンスに関する研究内容について、ポスターを貼った各校のブースで評価者、参加生徒、一般来場者に説明をする発表会でした。

会場はSSH研究指定校の生徒以外にも、保護者、教育関係者、および一般来場者、さらには海外数カ国・地域の生徒たち（使用言語は英語）も参加しており、数千人規模でたいへんな賑わいを見せていました。

本校からは、岡本笙君、小田島瑛司君、角田智哉君、田上大喜君、前田将宏君の1年生5名が参加し、『一生に一度しか交尾しないヒトスジシマカの雌に2時間で10回以上交尾行動を起こさせるには』という研究テーマについて発表しました。雌の蚊の交尾は、一生に一度であると言われていますが、蚊の雌は受精嚢という精子を蓄えることが出来る袋を持っており、一度の交尾で生涯産卵する卵全てを受精させる事が出来るだけの精子を受け取ることが出来ます。今回の研究は、ヒトスジシマカの雌がヒトの足の匂いに特別に反応し、複数回交尾活動を行うというこれまでの研究結果を更に追究し、何回まで交尾行動を起こすのかを確認するというものでした。羽化後4日目の雌7匹と雄9匹の蚊を用いて実際に実験を行い、その方法や結果について発表しました。高校に入学して数ヶ月しか経っていない1年生の生徒が、熱心に思いのこもった説明をしていたのがとても印象的でした。その甲斐あって、本校ブースには、常に多く来場者の人集りがあり、生徒たちが休憩する時間もないほどの盛況ぶりでした。



最終日6日の午後は、ポスター発表の表彰が行われました。表彰には、①平成25年度SSH指定校約40校を対象とする部門（文部科学大臣賞他）、②25年度以外の年度の指定校約160校を対象とする部門（ポスター発表賞）、および③全指定校と海外招聘校をあわせた約230校を対象とする部門（生徒投票賞）があります。本校は、第一期平成14年度～16年度、第二期17年度～21年度、第三期平成22年度～26年度と、SSHが始まった最初の年度から13年間研究指定を受けています。さらに今年度、第四期平成27年度～31年度までの5年間の研究指定を新たに受けたところで、前述②と③の部門の対象校になります。審査は、②については専門的な知識を有する有識者の評価に基づき、また③については各校参加生徒の投票に基づき行われ、②は12校、③は10校の入賞校の選出になっていました。

入賞校の発表は、生徒および関係者千人を超える参加のもと、③の生徒投票賞・②のポスター発表賞、等々の順に行われ、本校は②、③ともに入賞という輝かしい結果を残しました。ともに入賞していた学校は、本校を含めて2校ありました。有識者・参加生徒それぞれによる評価をいただいたことがとても素晴らしい発表であった証であり、たいへん誇りに思っています。

今回参加の5名の生徒たちにとっても、2つの入賞はたいへん嬉しいことであり、今後の励みにもなったことでしょう。校外に出て他校の取組みを見聞し、刺激を受けることで、より高いレベルへ目を向けることを学んだこともたいへん有意義であったと思っています。

また、今回の受賞は長きにわたりSSH研究指定を受けてきた本校にとって、新たな平成27年度からのSSHのスタートとして大きな活力を与えてくれたと確信しています。



沖縄修学旅行と「平和学習」 ～沖縄とかかわり続けて～

附属特別支援学校 副校長 高岸正司

本校では、平成元年から沖縄に修学旅行に行くようになりました。それまでは、九州の別府・阿蘇、そして帰路で広島平和公園に行くというコースでした。いずれにしても、高等部の修学旅行は、一つのテーマとして、平和学習がありました。

飛行機に乗っての沖縄への修学旅行は、当時の養護学校としては全国的にみても先駆けだったと思います。生徒たちになかなかできない経験をさせたいという教員の思いがこの修学旅行を実現させました。中学部では、新幹線を使いながら信州白馬まで行ってみんなで八方池まで登り、北アルプスの山々を見ること。そして、高等部では、飛行機に乗って、京都とは気候も風景も言葉も違う沖縄を体いっぱいを感じる事がねらいでした。エメラルドグリーンで輝く沖縄の海で泳ぎ、沖縄修学旅行を始めた頃は沖縄の養護学校と交流をしました。その時に、京都のことを沖縄のみんなに伝える学習も行いました。そのために、みんなで京都らしい金閣寺や清水寺等の寺社、仏閣に校外学習で訪れ、写真やビデオレーターで交流校に送りました。

その後、様々な学校で「総合的な学習」が展開されることとなりますが、本校の修学旅行は、生徒たちの意欲に根ざし、様々な教科の学習も合わせた、「総合的な学習」だったと言ってよいでしょう。



沖縄の海で泳ぐ生徒たち

平和学習

平和学習もその中の大きな学習の柱でした。

沖縄で私が知った言葉がいくつかあります。「命どう宝」「ユイマール」「なんくるないさあ」といった言葉です。今年、終戦70年を迎えましたが、これらの言葉は、終戦のわずか4ヶ月前に始まったあまりにも悲惨な沖縄戦と深くかかわっています。私が初めて沖縄修学旅行の引率で行く際に、当時の副校長先生（佐藤俊雄先生）は、「沖縄にはいい加減な気持ちで行ってはだめだよ」と言われたことを思い出します。

初期は、読谷村のチビチリガマを訪れ、平和学習に取り組みました。このチビチリガマでは、80名以上の

方が亡くなっています。（実は、近くにあるシムクガマでは千人にもおおよぶ避難民の方たちが助かっています）

本校では、教育課程のコアになる「生活」という学習があります。その学習では、「主体者として人と共に生活をつくり、暮らす喜びを、様々な活動を通して実感する」ことがねらいになってきます。この学習での学びを土台として、私たちは、「平和とは、身近な大切な人（親・兄弟・友だち）と、普通の生活を過ごせること」と捉え、戦争がいかにかこの生活を破壊するかを、子どもたちに伝えることにしています。

「ガマという真っ暗な中で、生活する」「水を取りにガマを出ると、鉄砲で撃たれて死ぬ人もあった」「お父さんお母さんが自分の一番大切な人の命を自ら奪う」等々。

実際に真っ暗なガマに入って、問いかけます。「こんなところでは、ご飯食べられない」「寝られない」「なんで、ここにいるの?」。素朴な質問を返す生徒もいます。

現在は、平和学習の場を、南部にある平和祈念公園、そして対馬丸記念館に変え、実施し今に至っています。



チビチリガマの入口と千羽鶴

「なんくるないさあ」にこめられた意味

「なんくるないさあ」の意味をいろいろ調べていくと、単に「なんとかなるさ!」という意味だけでなく、「挫けずに正しい道を歩むべく努力すれば、いつか良い日が来る」と言った願いにもとれる深い想いがあったことに思い至ります。「普通に生活をして正しい道を歩いていたのに、なぜこのような戦（いくさ）にあい、尊い命（命どう宝）を奪われなければならないのか。でもいつか良い日がくるよ」という「なんくるないさあ」なのです。

「沖縄にいい加減な気持ちで行ってはだめだよ」と語っていた副校長先生の言葉の意味がわかるまでに長い月日がかかりましたが、じっくりと子どもたちに、授業を通して沖縄の過去からつながる現在（いま）を伝えていくことの大切さを改めて感じています。

法律を身近に

社会科学科講師 比良 友佳理

平成27年4月より社会科学科に着任し、日本国憲法など法律学の科目を担当しています。生まれも育ちも北海道、「どさんこ」ですが、縁あって歴史と文化に溢れたこの京都で教育や研究に携われることを大変嬉しく思っております。

主な研究分野は知的財産法で、特に最近は著作権と憲法上の表現の自由の関係について研究しています。文化の発展を目指す上で、創作活動の促進と著作物の利用の自由というバランスを図ることは必要不可欠です。インターネットやデジタル技術が普及し、写真、イラスト、動画など、誰でも簡単に創作活動を行い、一瞬で世界中に発信できる時代になりました。そうした現代に適した法のあり方を考えていきたいと思っています。

「法律」と聞くと「怖い」「難しい」「堅苦しい」とい

うイメージを持つ人が少なくありません。しかし法律は私たちを処罰したり義務を課したりするだけのものではありません。たくさんの人が生活している社会が円滑に動くよう、(もしかすると気づかぬうちに)その根底を支えてくれているものです。また、日々目まぐるしく変化する社会情勢と密接に繋がっています。子どもの人権、教育を受ける権利、個人情報保護、いじめ・体罰問題など、教育を取り巻く法律問題は枚挙に暇がありません。将来、教職を目指す学生の皆さんにとっても、決して無関係なことではないのです。

できるだけ法律を身近に感じてもらえる授業を心がけ、皆さんと一緒に成長していきたいと考えています。物事を法的に考える力を身につける一助となれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

学習はいつまでも

大学院連合教職実践研究科准教授 徳永 俊太

2015年4月より連合教職実践研究科の准教授に着任しました徳永です。小学校、中学校、高校と京都の公立学校でお世話になってきましたので、京都で教員養成に携われることをうれしく思っています。

研究ではイタリアの教育、特に歴史教育を扱っています。大学でイタリア語を勉強した後、大学院で人と違う研究をしてみたいと思った私は、日本で誰も手をつけていなかったイタリアの歴史教育の研究に着手しました。今回は教員養成という視点から私の研究の内容と最近考えていることを紹介したいと思います。

イタリアの歴史教育は1970年代末に大きな転換を迎えました。簡単に言うと、教師の指導を中心に据えるのではなく、子どもの学習を中心に据えることが提起されたのです。その時に出てきたのが、新しい歴史教育を実践する教師の専門性をどうやって担保するのかという問題でした。特に養成期間を終えてしまっている現場の教師への対応です。ここでイタリアの人たちは労働者の権利として公的に定められた生涯学習

の制度を利用し、教師が自ら学習し、自分の専門性を高めていくことを主張しました。これは今の日本の教育にも通ずる問題です。学校教育に求められる内容が日々変わっていく中で教師はどのように自分の専門性を高めていくのか、私はイタリアの教育の研究を通してこの問題に対する示唆を得ようとしています。実はこの問題は教師だけではなく、目まぐるしく変化する現代社会で生活するすべての人々にも当てはまる問題です。さらに考えを進めると、社会に出た後にも学び続ける必要があるのであれば、学校教育では何を学習すべきなのかという問題も出てきます。

問題はどんどん大きくなっていきますが、まずは自分のこととして、以下のことを考えてみてはどうでしょうか。すなわち、自分がいま何を学習しているのか、これから何を学習すべきなのか、ということについてです。今後、いろいろな機会ですいろいろな方とこの問題について議論できれば幸いです。

「心に届く」指導と対応

大学院連合教職実践研究科教授 河村 豊和

今年度から実務家教員として大学院連合教職実践研究科で勤務することとなりました。

私は、京都府公立学校教員として38年間勤務し、社会科の授業や生徒会の指導、学年主任や教務主任等を担当した後、管理職として8年間学校経営に携わりました。また、その間、社会教育主事や研究主事、人事主事として教育行政にも関わり多様な教職経験を積ませていただきました。この度、ご縁があり大学院連合教職実践研究科の生徒指導力高度化コースに所属し、これまでの教職経験を生かして、将来学校をリードできる教職員を目指して研究や実践に励む院生の指導、支援に当たることとなりました。

さて、急激な社会の変化に伴い、学校現場には様々な教育課題が生じ、その解決を図る教育改革の諸施策と合わせて、学校はその解決や対応に日夜精力的に取り組んでいます。また、学校教育に対する保護者や地域社会の期待や要望もますます強まり、時には利己的な要求が持ち込まれることも見られるようになっていきます。その中で、学校は生徒・保護者の期待や願いに応え信頼される学校づくりに努めていますが、最も肝心なことは教職員一人一人の指導や対応、具体的には

その振る舞いや言葉、姿勢や態度が生徒や保護者の心に触れ、心に届くものとなっているかということです。些細な言葉や態度一つでも心に届くことなく齟齬や誤解が生じれば、心が離反し信頼関係が崩れ、教師不信、学校不信に繋がり、学校危機を招くこととなります。学校を預かりそのような場面にたびたび直面する中で、絶えず自分や教職員に問い掛け徹底してきたのが、「心に届く」指導や対応について振り返り、実践することであり、そのような姿勢が困難を打開したこともありました。

教職を目指す院生が日々の研鑽を通じて、理論と実践の往還により実践的指導力を身に付けることに加え、その根底において生徒や保護者の心に届く教育愛や信念を確立して欲しいと願っています。

私自身も実務家教員という立場に求められる役割や期待を模索し具体化して、院生一人一人が実践的指導力を身に付け教職への確かな道を歩めるよう、心に届く指導や支援に努めたいと考えています。どうかよろしくをお願いします。

生徒第一

大阪府立牧野高等学校 教諭 **和田 美紀子**
(数学領域専攻 平成27年度卒業生)

4月から教師として働き出して、早4ヶ月が経ちました。学校の仕組み、分掌の仕事など分からないことがたくさんある中で目まぐるしい日々を過ごしてきました。授業準備をする際には、発問を工夫することや身の回りの事象と関連づけて説明することなど、大学で学んだ様々なことを思い出します。それでもまだまだうまくいかないことも多くあり、授業は毎回緊張しています。どうしたらもっと生徒の興味を引けるのか、分かりやすく伝わるのか、日々悩み、奮闘しているところです。

そんな私ですが生徒に元気をもらいながら頑張っています。何気ない会話の中で見せてくれる生徒の笑顔に救われています。大学時代に行った土曜補習のボランティアや教育課題研究実地演習、インターンシッ

ブ、教育実習等で生徒と積極的に関わろうと努力したことが、生徒とのコミュニケーションに活かれています。大切なことは変に気取らず、自分自身がありのままの姿を見せ、心を開くことだと思い、それを実践しています。また、生徒の様子をよく見て、ちょっとした変化に気づき、よいところをほめることも大切だと感じており、私は常に生徒の良いところを探すように心掛けています。

生徒と関わる中で、この子たちのためにもっと頑張りたい、この子たちの可能性を大切にしたい、そんな気持ちが湧きおこり、それが私の原動力となっています。「先生」と呼んでくれる生徒たちに応えるために、これからも学び続ける努力をし、「生徒第一」を念頭におき、これからも頑張っていきたいです。

書道を好きな生徒を育てる

大阪府立芦間高等学校 教諭 **藤原 季代**
(美術科教育専攻書道分野 平成19年度卒業生、平成21年度大学院修了生)

幼いころより教師という仕事に憧れ、大学を卒業してからは、早く現場を経験したいと、院に通いながら大阪府立の高校で講師をしていました。院を修了後、何年か常勤講師をした後、大阪府に採用が決まり、今の学校に赴任してから3年目を迎えました。

大学時代、書道科に所属し、書道の専門性を深く学ぶにつれ、その楽しさに魅了され、生涯続けていきたい、書道を通して生徒たちと関わっていきたく強く思うようになりました。そして、その夢が叶った今、書道を通して生徒たち一人ひとりとの距離が次第に近くなっていく嬉しさ、また書道室に入ってくるなり「先生今日は何するのー？」と授業を楽しみにしてくれている姿に、教師としての仕事の喜びや醍醐味を感じさせてもらっています。

書道部の成長も楽しみの一つで、毎年夏合宿に行ったり、文化祭で書道パフォーマンスを披露したり、全国コンクールへの出品など精力的に活動をしていま

す。現在部員は27人になり、初心者状態で入部してきた生徒でも、練習を重ねるうちにめきめきと力を伸ばしています。そのうちに書道という芸術の奥深さに触れ、離れられなくなっていく生徒もたくさんいます。そんなクラブ員を見て、私自身も大学時代のような、ひたすら書表現に情熱を燃やしていた頃を懐かしく思うとともに、常に技術を磨かねばという思いにさせられています。日々生徒に関わる中で、多くのことを生徒と一緒に感じ、考え、学び、教師として一步步成長させてもらっています。私の目標は、常に書道の楽しさを伝えたい、書道の幅広い世界を知って、書道を好きになってほしいというものです。これから出会う多くの生徒たちに、精一杯書道の魅力を伝え、書道を選んでよかったなと思ってもらえるよう尽力したいと思います。

～あなたは京教のネコにエサをやったことはありますか？～

この京都教育大学にネコがいることはたぶん多くの人が知っていることだろう。このネコたち、「かわいいから」といって放っておいていいのか。その実態を把握する必要はないのか。このような考えから、今回学生広報委員会では「京教のネコ」について調査し、考察してみた。

まず私たちは学内の見回りを行なってくださっている守衛さんたちに、学内のネコについて伺い、その結果から学内のネコの数とその居場所を表にまとめ

場所	種類	数
正門	茶ネコ	1
	白黒ネコ	1
西門	三毛ネコ	2
	白ネコ	1
大学 会館 付近	黒ネコ	1
合宿 所	黒ネコ	1
理科 実験 棟	白黒ネコ	1

ると左のようになった。これら以外にも2匹の飼いネコが本学構内に訪れていて、早朝と夕方の見回りの際によく見かけるとのことだった。ネコを見かけた人の中にはこのネコたちに名前をつけたり、エサをやったりしている人もいるだろう。しかし、果たして本当

にえさをやることは良いことなのだろうか。私たち学生広報委員会はここに注目し、この問題に取り組む自治体や大学構内にいるネコに対する取り組みを行っている大学取材した。



↑西門の白ネコ

学生広報
委員会

知ってい
～野良ネコ

～京都市の取り組み～

京教のネコの問題のほかに京都市でも野良ネコの問題がある。これまで京都市ではネコの鳴き声や糞尿、臭いなど地域住民への被害が発生していた。この問題に対して京都市は今年、「動物との共生に向けたマナー等に関する条例」を成立させ、野良ネコなどへの不適切なエサやりを禁止した。また、野良ネコを地域の住民の協力によって世話や管理をする地域ネコという活動や京都動物愛護センターの運営などもあり、積極的に野良ネコに関する問題の解決に取り組んでいる。

今回は、その中にある「京都動物愛護センター」を取材させていただいた。京都動物愛護センターの活動としては飼い主のいないネコなどの動物を保護し、里親として引き取りを申し出た新たな飼い主の方に譲渡する取り組みを中心に行っている。施設の職員の方にお話しを伺ったところ「何の責任もなくエサをやることによって、ネコは増えていきます。」ということであった。

～立命館大学 RitsCat

の取り組み～

大学のネコについて調査している私たちは、すでにこのような地域ネコならぬ大学ネコの取り組みを行っている団体を発見した。それが立命館大学 RitsCatである。RitsCatは4年前の2011年に結成され、立命館大学衣笠キャンパスにいる7匹のネコのエサやり等の保護活動を行っている。私たちはRitsCatへ取材に向かった。はじめに主な活動であるネコのエサやりの様子を見させてもらった。決められた時間に決められた場所に向かい、ネコもまた同じタイミングでエサをもらいにくる。エサをやるだけでなくどのくらい食べたか、様子に変化はないかどうかを観察する。時には

ますか？ のエサやり問題～

獣医の指示を仰ぎ対応するという徹底ぶりである。ネコが増えていけないために行う去勢も大切な作業の1つで、その印として耳が少し切られたネコがいた。



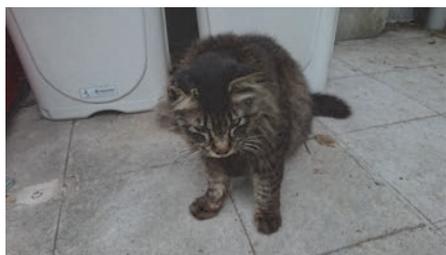
↑エサやりの様子



↑不適切なエサやりを禁止する RitsCat のポスター

～取材を終えて～

実際に野良ネコにエサをやることによってネコが増える。そして、保護されるネコは増え、殺処分されるネコも増える。この現象は大学内のネコでも起こりうる。京教ではネコの去勢を行うこともなければエサやりの管理をする人もいない。RitsCatの創設者は無責任に放置されたネコをどうにかしたいと思い個人でエサやりを始めたそうだ。私たちもこうしたネコの問題が手遅れになる前に動き出さなければいけないのかもしれない。



← 正門
の茶ネコ

～隣の学生さん～

第2回

Amazon サークル

って何!?



↑ Amazon 愛を熱く語る平田部長

世界最大の通販サイト、Amazon。利用の経験がある方も少なくないのではないだろうか。その Amazon を“嗜む”サークルが京教にはある。その名も、京教 Amazon サークル(大学非公認)である。Amazon を通じて幸せになることが究極目標である Amazon サークル部長の平田健輔さん(美術領域専攻3回)は Amazon 歴が何と10年を超える。平田部長は「Amazon が僕に何をしてくれたかではない。何故愛せるか？本能だ。そこに Amazon があるからだ。」と Amazon への愛を熱く語った。「年間××万円以上の買い物をしている、Amazon 歴が10年を超えている、Amazon を愛している」という3つの入部規則を満たしている方は、彼と一緒に「カートに入れる」ボタンを押してみようだろうか。今まで経験してこなかった買い物が、そして人生観が、見えてくるかもしれない。現在、部員は1名。



← 人気漫画「よつばと！」のリボルテック・ダンボーと写真に収まる平田部長

追懐「到り得て帰り来れば別事なし」

京都教育大学名誉教授 脇坂 淳

好きな絵はと問われると、即座に「松林図屏風」(東京国立博物館蔵)が思い浮かぶ。桃山時代の画家、長谷川等伯(1539-1610)の高名な作品である。六枚折れの一双眼屏風に、水墨の濃淡を駆使して霧に見え隠れする松林が描かれ、数えてみると僅か二十数本が林立するだけ。それに薄墨の外隈を施した稜線、雪を冠した遠山のほんの一部が表されるだけである。この簡潔な松林図が語りかけるものは。

松林を縫って霧が立ちこめる。松の幹を思い切って描き消すことが棚引く空気を存在せしめている。この空気感は古画に倣うにとどまらず、等伯自身の自然体験に起因していよう。生地、能登の七尾へ向かう道を行くと松林図から飛び出てきたかのような松の樹に出会う。するとそれらの松樹は等伯にとっての原風景だったのだという思いに到る。また、遠くに望まれる雪を冠した山は日本三霊山の一つでもあり、北陸地方で立山に次いで標高を誇る白山に同定されたりもする。



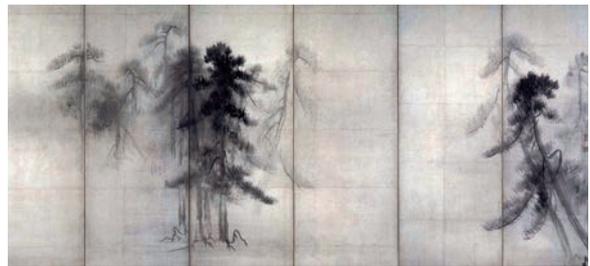
長谷川等伯筆 松林図屏風(左隻) 東京国立博物館蔵

松樹は遠目には優しげに見えるが、近寄って見ると葉叢を表すタッチの激しさに驚かされる。等伯は金碧の祥雲寺(現智積院)画を完成させ、狩野派を凌駕し得たと思った矢先、後事を託さんと期待していた息子の久蔵(1568-93)を失う。その愛児を失ったとき、等伯の悲しみの詩情は慟哭の情感をもっておおわれたに違いない。運命の皮肉に向かって、運命の非情に向かって、悲しみの涙つき果てた底より起こる慟哭の烈情、切々たる至情の訴えに耳目を傾けてみたくもなる。

ところで、屏風はその表面が紙貼りの場合、上下に五段の紙を貼り継ぐ構造のものが多く、各段の紙の継ぎ目が横一直線に通るのを通例とする。松林図には五段貼りと六段貼りの箇所がある。そして継ぎ目の列びが大きくずれる箇所や消えかかっている土坡の線にもずれが認められる。こうした謎が研究者の想像を駆り立ててきた。ずれを調整しつつ復元を試みると、上下左右にかなり広がりのある襖か壁貼付のような大画面

だったのではと思わせたり、紙質が薄く粗末であるため草稿とみることできる。ところがこの屏風の伝来については明治からせいぜい幕末期ぐらいまでしか辿れず、それ以前は杳として知れない。ために復元も正確な結論を導けずにいるのであるが。

蘇東坡の作とされる詩に「廬山は煙雨浙江は潮、未だ到らざれば千般恨み消せず、到り得て帰り来れば別事なし、廬山は煙雨浙江は潮」とある。霧に霞む廬山、銭塘江の潮流、この二大奇観を一度は訪ねてみたい。未練を残すまいと念願を果たして帰ってきてみると、天下の名勝、廬山の煙雨も浙江の潮も、ともにそのままである。これは禅で「悟り得たとて別に変わりはない」の譬えとして引かれる。悟れば何か格別な不思議さが得られるかと思って修行する。たとえ悟り得たとしても「山は山、水は水」であって変わるところはない。されど外見に変わりはなくても、心にかかっていた迷いは消え、新たな心境の「別事なし」に到る。



同(右隻)(石川県七尾美術館「長谷川等伯展」図録2005より)

美術を見る目も同じであろう。不思議に思える謎は魅力の衣を纏ってあまた潜んでいるが、謎解きで得た知識を一旦放下して、対象と素直に向き合うことが肝要である。あるひとの言を借りてみると、「私は松林図とは本当によくお話をしています。その時々、自分が抱えている誰にも言えない気持ちや迷い、悩み、嬉しいこと、未来を見据えた目標、なんでも心に浮かぶことを話しかけるのです。そうしていると一時間なんてあっという間に過ぎてしまっていて、帰るときにはどこかすっきりした気持ちで、またいつか会いましょうね、と旧友と別れるようにその場を立ち去ることが常となりました」。

松林図の魅力は見る人との語らいの中に秘められている。霧は晴れるのか、それともますます濃く、深くなっていくのか、晴れそうで晴れないのか、松林図と対話する人の心の反映次第である。研究室でそんな話をしていたことを思い出す新涼の候である。

第 136 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522

京都市伏見区深草藤森町 1 番地

京都教育大学総務・企画課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail : kouhou@kyokyo-u.ac.jp

136 号編集後記

広報誌「KYOKYO」をお届けします。本号の特集は「特報！京都教育大学シンボルフレーズ決定」です。本学では平成 26 年度から大学のブランド再構築に取り組んでいます。その一環として、本学が目指すべき価値や関係者の皆さんの思いを象徴する言葉として次のシンボルフレーズをまとめるまでの道のりを紹介しています。

「先生になりたいーそれはかなう夢」

今後、このシンボルフレーズを様々な面で活用していく予定です。

今号の表紙を飾るのは附属桃山小学校 6 年生の藤綱亮介さんの作品です。鮮やかに描かれた一匹のクモ。その模様にはある秘密が、、、裏表紙は同じく附属桃山小学校 1 年生の岡田奏人さんの作品です。ゆめの電車に乗って海へと向かう、とても楽しそうな雰囲気が伝わってきます。表紙裏の本人コメントとあわせてお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 細川 友秀

<京都府「配偶者等からの暴力をなくす啓発期間」について>

京都教育大学は、京都府及び京都府男女共同参画センター「らら京都」が主催する「平成 27 年度 配偶者等からの暴力をなくす啓発期間」（11 月 12 日～25 日）に協賛しています。この事業は、DV 被害者が自ら被害に気づき、安心して相談機関等に相談できる環境づくりのため、集中的に広報啓発活動を行う期間を設け、2 次被害の防止を中心とした啓発事業を実施し、DV 根絶の機運を高めることを目的としています。

ひとりで悩まないで！

知っていますか？
DVのこと

DVとは、夫婦や恋人などの、親しい男女の間で起こる暴力のことをいいます。

京都府では、被害者が安心して相談できる環境づくりと、DVを許さない社会づくりを進めています。

京都府府民生活部男女共同参画課
TEL 075-414-4291
<http://www.pref.kyoto.jp/josei/dv13.html>



京都教育大学

地域連携・広報委員会

委員長	細川 友秀					
副委員長	丹下 裕史					
委員	濱田 麻里	齊藤 正治	西村佐彩子	吉江 崇	相澤 雅文	
	中俣 尚己	Andrew Obermeier	今井 健介	佐藤 忠司		
事務担当	総務・企画課					



京都教育大学広報 第136号

発行日
2015年10月31日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>